

# 現代日本の文化資本と階級分化

## —1995年SSMデータと2015年SSMデータの多重対応分析<sup>1</sup>—

磯 直樹  
(慶應義塾大学)

竹ノ下 弘久  
(慶應義塾大学)

### 【論文要旨】

ピエール・ブルデューの『ディスタンクシオン』(1979)の刊行以後、文化資本概念と社会空間概念は、階級分析・社会階層論の研究に多大な影響を与えてきた。日本でも1995年以来、SSMデータを用いてこれらの概念が日本社会の分析に応用されてきた。本稿では、近藤(2011)が2005年SSMデータを用いて行ったように、SSMデータを用いて社会空間としての階級構造を描くことを目的とする。本稿の議論が近藤(2011)と異なるのは、1995年SSMデータと2015年SSMデータを用いることに加え、近藤とは異なる形でブルデューの理論を再構成していることである。本稿では、文化資本を文化活動と文化資産に関する変数で構成している。1995年SSM調査は、文化活動に関する質問項目が2015年SSM調査よりも多く、両者は厳密には比較できない。本稿では分析手法として多重対応分析を用い、扱う質問項目を両者で揃えず、できるだけ多くの関連項目を用いて分析した。このような分析を通して、文化資本がどのように社会空間を構成するかを考察した結果、以下のような結論が導き出された。すなわち、資本の総量によって階級の上下を定めるとき、「下」から「中」まではほぼ一つの軸によって階級の上下が定まる傾向にあるが、「中」から「上」にかけては文化資本の量によって階級が分化する傾向が見られる。大まかな傾向として、これは1995年SSMデータと2015年SSMデータと同様であるが、男性の方が女性よりもこの傾向が顕著である。

キーワード：文化資本、階級分化、社会空間、対応分析

## 1. 文化と階級・社会階層の研究

ピエール・ブルデューの『ディスタンクシオン』(Bourdieu 1979a)刊行以後、文化と階級・社会階層の関係を扱う研究は国際的に蓄積されてきた。そのような蓄積と研究動向を芸術社会学と文化社会学の枠組みで網羅的に整理した *Routledge International Handbook of the Sociology of Art and Culture* では、ブルデューの業績を「中心的なプラットフォーム」(key platform)と位置付けている (Hanquinet & Savage 2016: 4)。また、欧米諸国の階級分析・社会階層論の概論においても、代表的な学説・アプローチとして、ブルデューの業績が位置付けられることが多い(Wright 2005; Bosc 2013; Atkins 2015)。

文化と階級・社会階層に関する研究は、1990年代以降、日本でも蓄積されてきた。ブルデュー自身が再生産論者でないことを強調していること(Bourdieu 1990)に注意する必要がある

---

<sup>1</sup>本研究は、JSPS 科研費 JP25000001 の助成を受けたものである。

ものの、1990年代には文化的再生産の理論家として位置付けられた(宮島 1994; 原・盛山 1999)。日本の文化的再生産論はその後独自に展開していった(大前・石黒・知念 2015)が、文化と階級・社会階層という観点に限定するならば、SSMデータを用いた研究を中心に研究が蓄積されてきたと考えることができる。1975年SSM調査から調査票に文化活動に関する質問項目が取り入れられ、これまでのSSM調査の中では1995年版が文化活動に関する質問項目を最も多く含む。

このようなSSMデータを用い、文化資本とライフスタイルの関係(白倉 1997)、文化資本と再生産(片岡 1997)、文化的オムニボア論(片岡 2002, 2003)、消費とライフスタイル(中井 2011)などの研究が行われてきた。また、近藤博之(2011)は、文化資本によって社会階層をどのように再定義できるかを「社会空間」論として検討した。本稿では、SSMデータを用いた以上のような研究と海外の研究動向を踏まえつつ、いずれの議論にも深く関わる問題として、文化は階級・社会階層をどのように構成しているのかについて検討を行う。

## 2. SSMデータで捉える文化と階級・社会階層

本稿で用いるのは、1995年と2015年のSSMデータである。前者を用いるのは、SSM調査としては文化活動に関する質問項目が最も多く調査票に含まれたからであり、後者は最新のデータだからである。両者では、文化活動に関する質問項目の数も中身も異なり、単純な比較を行うことはできず、時系列変化を確認することも容易ではない。他方、後述するように、両者から理論的には基本的に同一の解釈を提示することが可能である。したがって、本稿では2種類のデータからなるべく比較可能な形で変数を選択しつつ、比較そのものよりも文化と階級の関係を実証的に分析することを目的とする。以下では、両者が具体的にどのように異なるのかを確認するために、両者の質問項目を対照させる。

SSMデータを用いた従来の研究では、職業カテゴリーなどを基に社会階層を定義・分類した上で、そのような「階層」と文化活動ないしは文化的趣味との関係を計量分析で捉える方法が一般的な特徴として見られる。例えば、片岡は「階層研究における『文化』の位置 — 階層再生産と文化的再生産のジェンダー構造—」において、「管理職を中心とするブルジョア層」と「専門職層」を対比させながら、前者を「伝統芸術趣味」志向、後者を「西洋文化趣味」志向として対比している(片岡 2000: 34)。片岡はこの2つと異なる「大衆文化」を、日本の文脈で文化的オムニボアと位置付けている(片岡 2000, 2003)。

「社会階層と階層文化、ライフスタイルとの関わり」を分析した白倉によれば、その因果の方向によって異なる3つの仮説がある(白倉 1997: 37)。それは第一に、「社会階層的要因によってライフスタイルは規定され、選択されてくるという説」である。次に、「社会階層上での上昇移動などを目的として意図的にライフスタイルが選択されるのだという仮説」である。最後に、「社会階層以外の様々な機会構造(opportunity structures)によって、ライフチャンス、

ライフスタイルが規定される」説である。これらの仮説を検証するにあたって、「出身階層」は父親の学歴・父親の職業威信・母親の学歴で定義され、「到達階層」は本人の職業威信・年収・所有財・自律性で定義される(白倉 1997: 41)。また、文化の序列が「正統文化」として予め定義され、クラシック音楽のコンサート、美術家や博物館での鑑賞、歌舞伎・能・文楽の鑑賞、華道・茶道・書道の活動、短歌・俳句の創作、小説や歴史の本の読書などの文化活動が「正統文化」を構成すると考えられている(白倉 1997: 41)。

中井(2011)は 2005 年 SSM データを用いてライフスタイルの分析を行っている。中井は「文化的オムニボア」概念は用いずに文化活動・消費行動を分析し、文化・消費ライフスタイルを因子分析によって 5 種類に類型化している。中井は 1995 年 SSM データと 2015 年 SSM データ用いた比較も行っているが、そこで用いられている「階層」概念は SSM の職業 8 分類である。

以上の 3 者の議論ではいずれもブルデューの著作が参照されているものの、ブルデューとの関連では「文化資本」に関心が集中している上、後述するように「文化資本」概念の用法に問題がある。これに対し、近藤(2011)は 2005 年 SSM データを用い、ブルデューに依拠して階層概念自体の再定義を試みている。近藤によれば、「ブルデューの方法をもとに日本社会の計量分析を試みた例はきわめて少なく、分析の焦点も文化的再生産あるいは文化消費のパターンに限られている。しかし、ブルデューが実際に行ったことは社会階層を多次元の連続的な空間としてとらえ、そこでの客観的な構造と人々の日常生活との関連を明らかにすることであり、まさに階層研究の中核的な問題が取り上げられている」(近藤 2011: 161)。

「社会階層を多次元の連続的な空間としてとらえる」ブルデューの社会空間概念とは、「社会空間を構成するのは、さまざまな場で人々の位置を決めるのに関係している権力や資源であり、ブルデューはそれを経済資本、文化資本、社会資本、象徴資本などの概念を用いて説明している」とされる(近藤 2011: 162)。ブルデューによって、このような「社会空間」をとらえるのに用いられる分析手法が多重対応分析である(Bourdieu 1979a)。この手法は、統計学的な仮説検証には適さないため、少なくとも『文化・階級・卓越化』(Bennett et al. 2009)が刊行される以前においては、アングロサクソン圏の社会科学で採られる手法ではなかった(Priour & Savage 2011: 572)。

近藤の整理によれば、これは「基本的には 1 と 0 の値でつくられる指標行列  $Z$ (個人を行に、複数の特徴を列に並べたもの)またはその積からなる対称行列  $B(=Z'Z)$ に含まれる関連(統計的独立性からの逸脱度)を、個人間あるいは特徴間の距離の加重平均として定義し、その距離情報をもとに全体の関連をできるだけ少ない次元で空間的に表現する技法」である(近藤 2011: 164)。

近藤は分析の前提として、「ブルデューが社会空間の構築に用いた変数は、本人の職業、父職(社会的軌道の指標)、父学歴(相続文化資本)、本人学歴(学校資本)、土地・株式等の経済資

産、収入(経済資本)、住居形態,別荘・食器洗い機・電話等の所有(消費水準),居住地の人口規模など」(近藤 2011: 164)と述べている。しかし、実際にブルデューが『ディスタンクシオン』(Bourdieu 1979a)で用いた変数と比べると、近藤が用いたそれらは限定的である。『ディスタンクシオン』の付録3に用いた変数の表が掲載されているが、ブルデューは文化活動や消費行動に関する変数も用いている。

近藤は、これらの変数を用いて分析を行った結果、「全体の変数間関連が作りだす分散(MCAではこれをイナーシャという)の63.9%を第1軸が、18.6%を第2軸が説明」しており、近藤は第1軸を資本の総量を示すものと解釈している(近藤 2011: 165)。他方、第2軸については、「親の学歴が低くなると所得や資産が大きくなる関係がみられるので資本構成のタイプの違いをとらえているといえるが、分散の割合は第1軸よりもずっと小さく、経済資本と文化資本は見かけほど対立的な関係にあるわけではない」という解釈を示している(近藤 2011: 165)。すなわち、近藤の捉えた「社会空間」は経済資本で大半が説明できてしまう、一次元的な傾向を持っている。

この分析結果は、一見すると文化資本が階級・社会階層をほとんど構成しないという日本の特徴を示しているかのようである。しかし近藤は、文化資本を学歴、本の蔵書数、美術品・骨董品、文学全集の保持など、非常に数少ない指標でとらえようとしており、そうした文化資本の定義や用いる指標の少なさが、結果に大きく反映されているのかもしれない。対応分析にもとづく結果は、文化資本的な財の保持も、経済資本と同様の位置にあることを示しており、近藤は、これらの結果から、現代日本社会における経済資本の説明力の高さを強調する。

近藤はまた、以上の分析を行った上で階層的クラスタリングを行い、5つのクラスを導出している(近藤 2011: 167-169)。続いて、これらのクラス間で文化活動・社会活動・消費行動が相互にどのように関わるかを「相同性仮説の検証」として分析している(近藤 2011: 170-172)。この分析は、文化活動・社会活動・消費行動に関わる変数で階級・社会階層の構成を分析するのではなく、両者を分けた上で、両者の関係を捉えようとしている。以上のような近藤の分析手法はSSMデータを用いた分析として独自性がある。

ここまで、SSMデータで捉える文化と階級・社会階層の主要な研究を概観してきた。両者の関係を通して階級・社会階層の概念自体を再考しているのは近藤である。しかしながら、近藤においては文化資本の定義に用いる変数が少なく、実質的には文化資本ではなく学歴資本を用いた分析となっている。文化資本として複数の変数を使うのであれば、SSMの質問項目では文化活動に関するものの方がより適切である。なぜなら、学歴の各カテゴリー内部の差異を捉える道具として文化資本概念を用いることが可能になるからである。学歴とほぼ同義なのであれば、ブルデューの理論を応用する文脈では、文化資本ではなく学歴資本として概念構成すればよいはずである。それでは、学歴とは異なる文化資本とは何か。次節では、

この問題を理論的に検討するために、文化資本概念と社会空間概念の考察を行う。

### 3. 文化資本と社会空間

文化資本については、「文化資本の三状態」というブルデューの論じた有名な論考がある(Bourdieu 1979b)。「三状態」というのは、身体化された状態、客体化された状態、制度化された状態である。この論考では、このような類型化に加え、学校の機能を強調している。それゆえ、「文化資本と学歴はほぼ同義」、「文化資本は理念型」と捉えることは十分に可能である。しかしながら、『ディスタンクシオン』以後のブルデューの議論と対照させるなら、このような形での文化資本概念の整理は一面的であり、ブルデュー自身によって誤解が招かれていると言わざるをえない<sup>2</sup>。

その理由の一つは、資本の形態や構成物は「ケースバイケースである要因が前面に出てきてそれぞれの界ごとに变化するもの」(Bourdieu 1979a=1990-I: 176-177)であり、「資本は界との関係なくしては存在することも機能することもできない」(Bourdieu & Wacquant 1992=2007: 137)からである。資本の何らかの形態や構成物を「文化資本」として類型化する前に行うべきなのは、どのような界があるかということであり、どのような社会的資源が各々の界で「資本」になっているのかということである。「資本とは社会関係であり、それが生産され再生産される界においてしか存在もしなければ、その効果を生み出しもしない社会的エネルギーである。階級に結びついた諸特性の各々は、その価値と有効性とを各々の界に固有の法則から受け取るのである」(Bourdieu 1979a =1990-I: 177)。

二つ目の理由は、ブルデュー自身が文化資本ないしは文化のエコノミーの問題として問うてきた問題は、「文化資本の三状態」の議論の範疇を大きく超えるからである。例えば、『ディスタンクシオン』の冒頭には以下の記述がある。「文化的財にもエコノミーがあるが、このエコノミーには特有の論理があり、経済至上主義を免れるためにはこの論理を抽出しなければならない。まず、文化的財の消費者とその嗜好が生み出される諸条件を明らかにするよう努めることによって、同時に、これらの財のうちある時点で芸術作品とみなされているものの領有の仕方にはどのようなものがあるか、また正統とみなされる領有の様式が構成されるための社会的諸条件はいかなるものか、そうしたことを記述すべく努めることによって」(Bourdieu 1979a=1990-I: 3)。「経済至上主義」を経済合理性や拝金主義のことであると理解するならば、ブルデューが捉えようとしたのはそれとは異なる文化のエコノミーである。

---

<sup>2</sup>主にフランス社会の文脈に基づく考察であるが、セールは「動転する(*dans tous ses états*)文化資本」という論考で、ブルデューの「文化資本の三状態(*trois états*)」の考察が文化資本としての学歴を静態的かつ同質的に捉えていることを踏まえて文化資本の類型と状態の再定義を試みている(Serre 2012)。また、プリュールとサヴィジは、デンマークとイギリスで行った調査結果を理論的に分析しながら文化資本概念の再評価を行っているが、その過程でブルデュー自身による文化資本概念の整理が界概念との関係ではなくハビトゥス概念との関係の考察に偏っていることを批判している(Prieur & Savage 2011: 569)。

換言すれば、経済合理性や拝金主義以外のいかなる原理によって社会は回っているのかをブルデューは問うていたのであり、そのような問いの探究に用いたのが文化資本概念である。このように考えるならば、理論上は文化資本を広い意味に取る必要がある。さもないと、文化資本と経済資本に加えて「資本の総量」が構成する「社会空間」の理論的含意も十分に汲み取ることができないだろう。

ブルデューにおける「社会空間」とは、具体的な事例としてはサン＝マルタンとの共著「趣味の解剖学」(Bourdieu & Saint-Martin 1976)と『ディスタンスション』で示された図式が該当する。前者は後者の一部として加筆修正された。両研究で用いられているデータは、1963年から1972年までのフランス国立統計経済研究所(INSEE)の調査データに加え、嗜好や文化活動に関する様々な調査データを組み合わせたものである(Saint-Martin 2013: 35)。ブルデューらはそこで用いる多重対応分析は、ブルデューとともにユルム街の高等師範学校で学んだ統計学者ベンゼクリによって考案され、ブルデューは1970年第初頭にこの統計分析を知った(Saint-Martin 2013: 39)。こうしてブルデューは、自らの社会学的分析と親和性のある方法として、多重対応分析を受容するのである。

既存のデータを用いた多重対応分析によって描かれる「社会空間」は、理論的・理念的な「社会空間」と同一ではない。さらには、後者に限定しても、『ディスタンスション』以後に理論的展開を遂げたと考えることは可能である。「社会空間と象徴空間」という題で1989年に東京で行った講演をもとにした論考において、ブルデューは『ディスタンスション』の議論を日本の文脈で捉え直しつつ、社会空間概念の方法的基礎について考察している(Bourdieu 1994=2007: 11-34)。彼は「社会階級なるものは実在しない」という。「実在するのは社会空間であり、差異の空間であって、そこでは諸階級が潜在的状態で、点線で、つまりひとつの所与としてではなく、これから作るべき何かとして実在する」という(Bourdieu 1994=2007: 32)。

このような「社会空間」は、調査データを集めて帰納的に構築することはできない。それは単純に、社会的差異を構成する諸要因を全て調べあげることができないからであり、理論的な仮定を置いた上で特徴的な社会的差異を選び取らざるをえないからである。加えて、既存の調査データを用い、それを理論的に解釈し、加工することによって「社会空間」を構築せざるをえない。ブルデューは「文化資本の三状態」(Bourdieu 1979b)で「文化資本」概念をきわめて一面的に切り取ってしまったが、それをそのまま用いて社会空間を描くことはできないのである(Prieur & Savage 2011; Serre 2012)。実際、ブルデュー自身も社会空間を論じる際には、文化資本を多面的に捉えようとしている。

そもそも、「資本は界との関係なくしては存在することも機能することもできない」(Bourdieu & Wacquant 1992=2007: 137)のであれば、文化資本はどのような界と関係があるのかという理論的な問題が生じる。この理論的問題を経験的課題として正面から扱った代表的研究が、ベネットらの『文化・階級・卓越化』(Bennett et al. 2009)である。この研究では、音

楽界や視覚芸術界などの7つの下位界に分けた上で調査設計を行い、調査データは多重対応分析で分析し、それぞれの下位界の構成要素がどのように軸を構成するかを分析している。すなわち、分析上は文化資本を分解ないしは分節化し、多重対応分析の結果の理論的解釈で文化資本概念を再構成している。

本稿では、SSM 調査の質問紙の特性から、こうした『文化・階級・卓越化』と同じ手続きで個別の界の特性を重視した分析を行うことができない。しかしながら、本稿で「文化資本」として想定する変数が実際に社会空間の軸を構成する要素となるならば、個別の界を捨象して社会空間の輪郭を捉えることも可能である。本稿ではこのように考えた上で、以下のように分析を行う。

#### 4. 分析戦略

本稿で用いるのは1995年SSMデータと2015年SSMデータである。前者を用いる理由は、SSM調査としては文化活動に関する質問項目が最も多く調査票に含まれるからである。子供時代の文化経験に関する質問項目も含まれ、文化資本を相対的に精緻に計ることが可能である。後者のデータを用いる理由は、関連する質問項目の数は前者よりも少ないものの、最新の調査だからである。これらのデータは、質問項目が部分的にしか重ならないため、厳密に時系列比較を行うことができない。そのため、本稿で行うのは仮説検証ではなく、データの分析を通して理論的な探索を行うことである。1995年SSMデータの方が2015年のものよりも文化資本をより精緻に捉えることができるため、理論的考察として、前者の結果から後者の結果の類推も行う。

採用する分析手法は多重対応分析<sup>3</sup>である。階級をあらかじめ定義するのではなく、階級を構成する変数として代表的な所得・学歴・職業・階級帰属意識などを変数に加え、文化資本を構成すると考えられる変数として文化活動・文化資産・子供時代の文化経験に関する質問項目を用いる。また、年齢も変数として加える。以上の変数を同列に扱い、多重対応分析によって説明率が最も高くなる複数の軸を理論的に解釈する。また、片岡らの先行研究（片岡2000）ではジェンダーによる違いが強調されてきたことをかんがみ、男女別に分析を行う。

#### 5. データと変数

分析に使用する変数は、階層帰属意識、年齢、経済資本、職業、学歴、文化活動、現在の文化資産、子ども時代の文化経験である。なお、カッコ内には対応分析の結果を散布図で表記するときに、各回答カテゴリーを表記するために用いた名称も記している。階層帰属意識(sclass)は5段階のものをそのまま使い、年齢(age)は10歳ごとにまとめてカテゴリー化して

---

<sup>3</sup>本稿では、対応分析の基礎については Clausen の『対応分析入門』(1998=2015)を、多重対応分析の方法については Le Roux と Rouanet の共著 (2010)を参考にした。

いる。経済資本は世帯収入(hinc)を用いている<sup>4</sup>。

職業カテゴリーはSSM職業8分類から専門職を3種類に分け、無業を加えた11個の変数に分けている<sup>5</sup>。それぞれ、高威信職・文科系専門職(prestige-culture)、技術系専門職(technical)、教育・福祉系専門職(education)、管理職(manager)、事務職(clerical)、サービス職(service)、熟練労働者(skilled)、準熟練労働者(semi-skilled)、非熟練労働者(unskilled)、無業(none)である。学歴は旧制と新制を変数として統合し、中卒、高卒、短大・高専大卒の4つに分類した。

文化活動に関する項目として、クラシック音楽の音楽会・コンサートへ行く(cmus)、美術展や博物館に行く(muse)、歌舞伎や能や文楽を見に行く(traditional)、華道・茶道・書道をする(tea)、短歌や俳句を作る(poem)、小説や歴史の本を読む(novel)、スポーツ新聞や女性誌を読む(spo)、手づくりでパンや菓子をつくる(sweets)、カラオケに行く(karaoke)、パチンコをする(pachi)、以上の質問項目を用いる。これらはすべて、活動の頻度を測定しており、「週に1回以上」から「ここ数年間したことはない」の5段階でたずねられている。文化に関わる財の所持については、ピアノ(piano)、美術品・骨董品(antique)、パソコン・ワープロ(pc)の所有の有無を用いた。また、2015年調査については文学全集(zen)の保持の項目もあったため、それも用いた。子ども時代の文化経験については、読書(book\_ch)、クラシック音楽(music\_ch)、美術館・博物館(museum\_ch)の3項目について、「よくあった」から「なかった」までの4段階でたずねられている項目を用いた。

## 6. 1995SSM データの分析結果

### 6.1 男性

男性のみの分析結果では、第1軸の説明率が43.4%であり、第2軸が14.7%となっている。前者は、所得、学歴、階層帰属意識、それぞれの高低に対応していると解釈できる。したがって、これは階級を構成する主軸として、ブルデューの言う「資本の総量」を示すものと考えられる。第2軸は、文化資本の多寡を示していると考えられるが、注意が必要である。なぜならば、文化活動の種類によって、この軸を構成するものとそうでないものがあるからである。

前者として挙げられるのは、クラシック音楽の音楽会・コンサートへ行く(cmus)、美術展や博物館に行く(muse)、歌舞伎や能や文楽を見に行く(trad)、華道・茶道・書道をする(tea)、

---

<sup>4</sup> 世帯収入については、次の5つのカテゴリーに統合した。ただし、回答選択肢が微妙に異なるため、完全に同一の金額とはなっていない。SSM2015については、200万円未満、200万円から400万円未満、400万円から650万円未満、650万円から950万円未満、950万円以上である。SSM1995については、150万円未満、150万円から350万円未満、350万円から650万円未満、650万円から1000万円未満、1000万円以上である。また、所得の高低を示すために、+や-の記号も用いた。同様に階層帰属意識、文化活動、文化資産の所持についても、+や-の記号を用いてその高低を示すこととした。

<sup>5</sup> SSM職業分類を細分化するにあたり、中井(2008: 18)を参照した。



短歌や俳句を作る(poem)、小説や歴史の本を読む(novel)に加え、子供時代の文化経験である。これらの変数については、活動の頻度が軸の向きにおおむね対応する傾向にある。後者としては、スポーツ新聞や女性誌を読む(spo)、手づくりでパンや菓子をつくる(sweets)、カラオケに行く(karaoke)、パチンコをする(pachi)が挙げられる。この分析結果から考えられるのは、前者は文化資本を構成する要素、後者には様々な学歴や職業の人が関わっていることから、それぞれの回答カテゴリーが軸の高低と明確な対応をしていないものと考えられる。

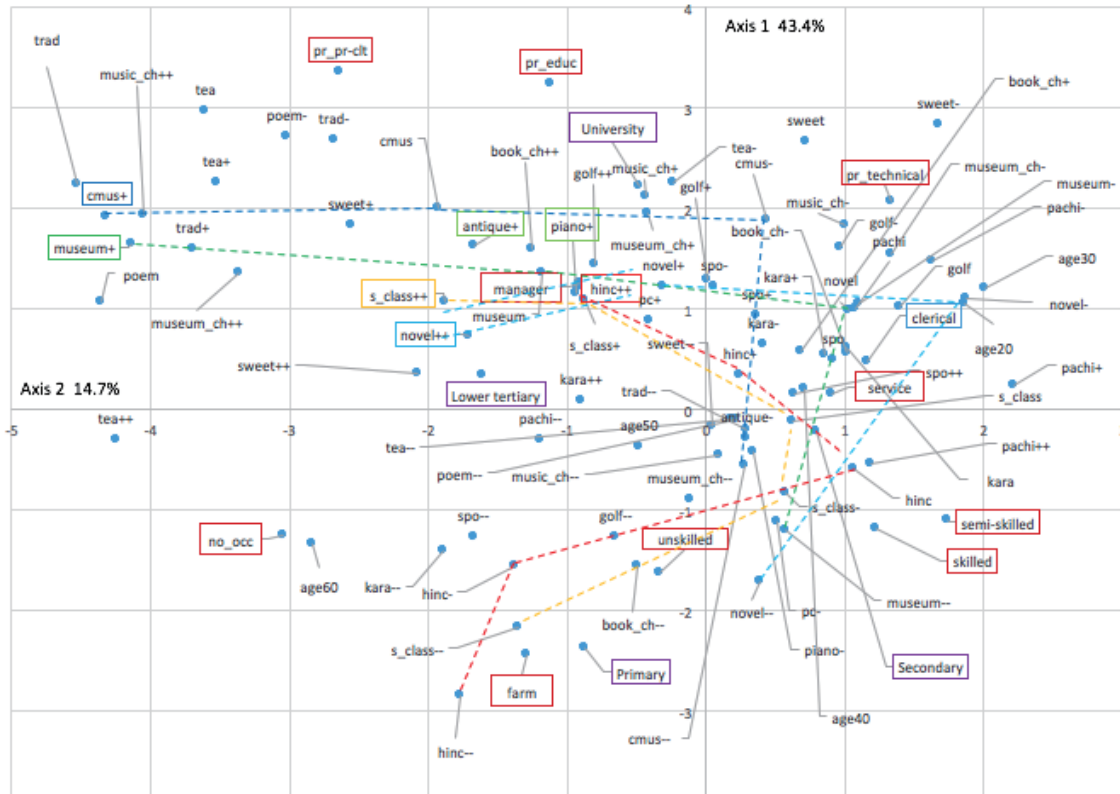


図1. 1995年の社会空間 (男性)

文化資産の所有の有無 (ピアノ(piano)、美術品・骨董品(antique)) については、第1軸と第2軸の双方で回答カテゴリーの位置が近い。すなわち、これらの文化資産を持たない人とは、資本の総量が少なく文化資本も少ないが、これらの所有者は、資本の総量も相対的に多く、文化資本も多く所持していることを表す。文化資産の所持は、経済資本から独立しているというよりも、一定の経済資本の所持を前提とし、そのうえで、ある種の文化資本の度合いの高さを表すものと考えられる。こうした傾向は、文化資産の所有に限らず、他の項目にもみられる。たとえば、美術館・博物館やクラシック音楽についての活動頻度は、資本の総量を多く持ち、文化資本の度合いが高いところに位置している。子ども時代のクラシック音楽の経験や美術館・博物館の経験についても、おおむね同様の傾向がうかがえる。

軸の構成を捉える上で特徴的な4つの変数、すなわち階層帰属意識、世帯収入、クラシッ

ク音楽鑑賞、美術館や博物館の訪問の各点を線で結ぶと、階級分化の特徴が見えてくる。さらに、これらの項目を中心としつつ、第2軸を構成していない他の文化活動との対応関係にも注目したい。資本の総量が少ないところから見てみると、第一に、最も低い世帯収入、階層帰属意識が「下」、農業従事者、非熟練労働者、初等教育のみの学歴が、まとまっていることが分かる。また興味深いのはこれらの人たちは、以下の文化活動に積極的ではないことである。ゴルフ・スキー・テニスをする、スポーツ新聞・女性週刊誌を読む、カラオケに行くなどをここ数年間1度もしたことはないという回答と、対応関係にあることを示している。カラオケなどは、多くの階層が享受する文化活動と思われるが、これらの資本の総量が少ない人たちは、こうした活動にも消極的であることを、分析結果は示している。

第2に、第1軸で原点よりも低い層を中心にそれらの周辺を見ると、階層帰属意識が「中」と「中の下」、世帯収入が350万円から650万円、中等教育（高卒）までの学歴、職業が熟練と半熟練、クラシック音楽のコンサートに全く行かない層がまとまっている。美術館や博物館に全く行かない層も比較的近くにある。他方で、他の文化活動については、パチンコに週に1回以上行くが、これらの層の近くにある。第1のグループが、いずれの文化活動に対しても消極的であったのに対し、第2のグループはパチンコについてのみ活動頻度が高い。パチンコは、一定程度の経済資本をもつブルーカラー層に顕著な文化活動であることを、結果は示唆している。このように2種類のまとまりを確認することができるが、ここまでは階級の上下として考えられるだろう。

第3に、資本の総量がさらに多いところを見ると、文化活動に関わる2つの線がある地点から直角に近い形で折れていることが分かる。2つの角は、職業に関しては事務職と専門技術職の中間にあり、世帯収入に関しては相対的に多い層に近づいている。また、クラシック音楽のコンサートにはほとんど行かず、美術館や博物館もほとんど訪問しない層に比較的近い。この緩やかなまとまりは、文化資本の量は少ないが経済資本は多い経済的階級と考えられる。

第4に、2つの線が伸びた先と2つの角の間を見ると、階層帰属意識が「中の上」と「上」、世帯収入が最も高い層、クラシック音楽のコンサートにも美術館や博物館にも比較的よく行く層がまとまっている。職業としては、管理職がこのまとまりに含まれる。これは、経済資本が多く、文化資本も比較的多い層と考えられる。大卒の学歴の位置は、このまとまりと第3のまとまりの間にある。

最後に、2つの線が伸びた先、つまりクラシック音楽のコンサートにも美術館や博物館にも行く頻度が最も高い層の位置を見ると、周辺には文化活動に熱心な層が集まっていることが分かる。このまとまりは、文化資本の量が最も多い文化的階級であると考えられる。この階級の特徴は、文化資本だけでなく、経済資本も多いことである。高威信職・文化系専門職は、このまとまりと第4のまとまりの間の位置にある。

以上のように、男性の場合は5種類のまとまりを確認することができ、資本の総量が比較的多い段階に達すると、文化資本によって階級分化していくと考えられる。換言すれば、資本の総量が比較的少ない階級は文化資本による分化が見られないということでもある。

## 6.2 女性

他方で、女性のみデータからは少し異なる側面が見えてくる。女性の場合、資本の総量を表すと考えられる第1軸の説明率が51.3%、文化資本の多寡を表すと考えられる第2軸の説明率が9.2%となっている。男性の場合は年齢の高低と文化資本の高低が明確に対応しているように見えるが、女性の場合は男性ほどそれが顕著でない。女性の場合、30代で文化資本が減少しているように見える。これは、30代の女性は結婚・出産を通じて、小さな子どもがいることが多く、その結果、文化活動に関わる余裕がなくなっていることを反映しているのかもしれない。このような結果からは、文化資本にはある種のジェンダーが作用していることがうかがえる。それでは、女性の場合にはどのような階級分化を見ることができるだろうか。

結論から述べるならば、大まかには男性の場合と同じような傾向が見られる。おおむね、第1軸は資本の総量を表すと解釈することができ、第1軸は、学歴、職業、収入、階層帰属意識の高低と対応している。初等教育卒、農業、非熟練、半熟練、熟練、販売・サービス、世帯収入が150万円未満、150から350万円未満、階層帰属意識が下の下、下の上については、いずれの文化活動に対しても消極的である。パチンコについては、男性の場合経済的に余裕のあるブルーカラー労働者が積極的に行う活動であったが、女性の場合は男性ほど階級との明確な対応関係が見られない。パチンコに月に1回程度行くという回答は、原点の近くに位置しており、幅広い階層の人々が行っている可能性もある。

第1軸が原点よりも上の部分については、おおむね階層的地位の高い人々が位置しているが、男性の結果と同様、文化活動に積極的な層と必ずしも積極的でない層に分化している。男性の場合、高威信・文化系専門職は、美術館・博物館、クラシック音楽といった文化活動に対して積極的であるが、女性の場合は、技術系専門職の近くに位置し、文化活動に対してはあまり積極的ではない。管理職、世帯収入が1000万円以上、大卒以上、「中の上」の階層帰属意識を持つ人は、相対的に美術館・博物館、クラシック音楽といった文化活動に対して、積極的な傾向が見られた。その他の重要な相違点として、女性の場合、無業者が座標の原点に近く、様々な層が無業者のカテゴリーに含まれている。男性の場合は、無業者が60代のカテゴリーと近い距離にあり、無業者の多くは退職者によって占められていることが理解できる。

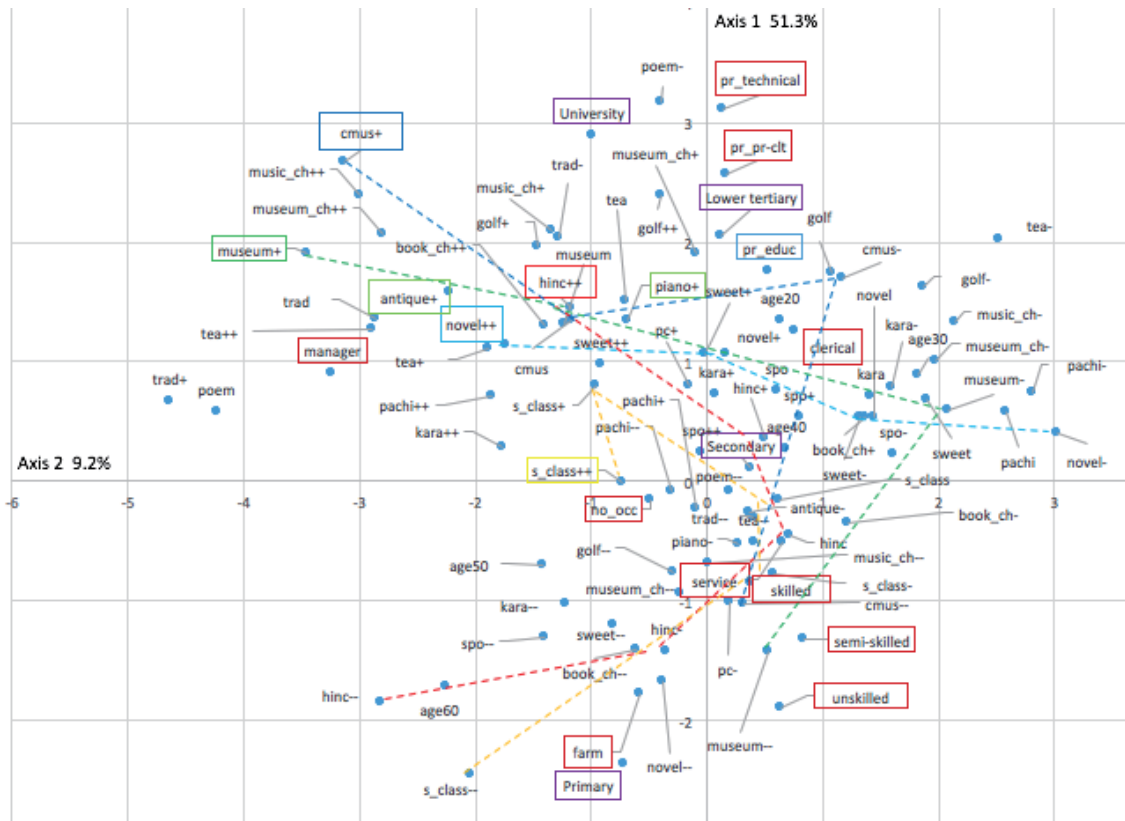


図 2. 1995 年の社会空間（女性）

## 7. 2015SSM の分析結果

### 7.1 男性

男性のみの分析結果では、第 1 軸の説明率が 54.2%であり、第 2 軸が 17.6%となっている。前者は、1995 年 SSM の場合と同様、所得、学歴、階層帰属意識、それぞれの高低に対応していると考えられる。したがって、これは階級を構成する主軸として、ブルデューの言う「資本の総量」を示すものとする。第 2 軸は、文化資本の多寡を示していると考えられる。1995 年 SSM の場合と異なるのは、文化活動に関わる 4 種類の変数がいずれも文化資本の多寡を表していると考えられることである。クラシック音楽の音楽会・コンサートへ行く (cmus)、美術展や博物館に行く (museum)、図書館に行く (library)、小説や歴史の本を読む (novel) のいずれもが、頻度の高さが文化資本の多寡と対応しているように見える。

1995 年 SSM データの場合と同様、軸の構成を捉える上で特徴的な 4 つの変数、すなわち階層帰属意識、世帯収入、クラシック音楽鑑賞、美術館や博物館の訪問の各点を線で結ぶと、階級分化の特徴が見えてくる。資本の総量が少ないところから見てみると、第一に、最も低い世帯収入、階層帰属意識が「下」、初等教育のみの学歴が、まとまっていることが分かる。インターネットで全く買い物をしない層もここに近い位置にある。

第 2 に、原点の周辺を見ると、階層帰属意識が「中」と「中の下」、世帯収入が並程度、中

等教育までの学歴、クラシック音楽のコンサートに全く行かない層がまとまっている。美術館や博物館に全く行かない層も比較的近くにある。このように2種類のまとまりを確認することができるが、ここまでは階級の上下として考えられるだろう。1995年SSMの男性のみの分析結果とは異なり、2015年SSMの場合はこれよりも資本の総量が増えると階級分化が始まっている。

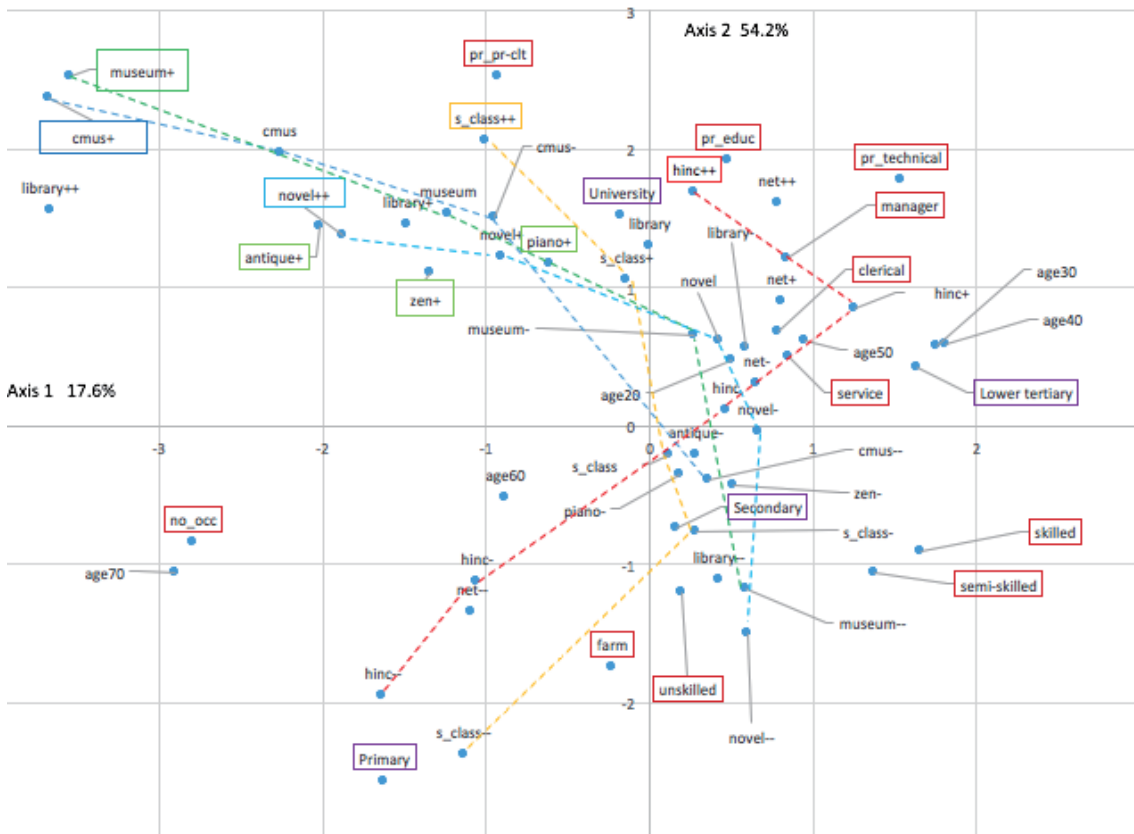


図3. 2015年の社会空間（男性）

分化の一つの方向は、経済資本は多いが文化資本は少ない層のまとまりとして見られる。これが第3のまとまりで、世帯所得が相対的に中の上の位置と一番上の位置の周辺に位置する変数の特徴として読み取ることができる。

第3に、資本の総量がさらに多いところを見ると、文化活動に関わる2つの線が中間地点周辺から折れていることが分かる。文化資本が少ない方が、第3のまとまりである。職業に関しては事務職、管理職、教育系専門職が並び、専門技術職も比較的近い位置にある。文化活動に関しては、図書館にも美術館や博物館にも数年に1度しか行かない層がこれらの回答カテゴリーの近くに位置している。

このまとまりから離れ、文化資本のより多い方向へ分化しているのが第4のまとまりである。大卒の学歴は両者の中間に位置している。第4のまとまりは、階層帰属意識が「中の上」

と「上」を結ぶ線分の周辺に見ることができる。そこには、クラシック音楽のコンサートには数年に1回程度、美術館や博物館には年に1回以上、図書館には毎月行く層がまとまっている。職業としては、高威信職・文化系専門職がこのまとまりに含まれる。また、文化資産に関し、ピアノ、文学全集、美術品・骨董品の所有は全てこのまとまりの近くに位置している。以上の点から、これは経済資本が多く、文化資本も比較的多い層のまとまりと考えられる。

最後に、文化活動に関わる2つの線が伸びた先、つまりクラシック音楽のコンサートにも美術館や博物館にも行く頻度が最も高い層の位置を見ると、近くには図書館に毎週通う層も位置している。このまとまりは、文化活動以外に共通項がないものの、文化的階級と考えることができる。1995年SSMの場合と同様、この層は経済資本も相対的に多い。

1995年との相違点を確認すると、1995年では世帯収入が700万円以上や1000万円以上、管理職層において、クラシック音楽や美術館・博物館といった文化活動に対して積極的であることと、一定の対応関係が認められた。言い換えれば、経済資本が多く、文化資本も相対的に多い層と位置付けられていた。しかし2015年の結果では、これらの人たちは、経済資本は多いが文化資本は少ないグループへと変化している。

以上のように、1995年SSMデータの場合と同様、男性の場合は5種類のまとまりを確認することができる。ただし、2015年SSMの場合は、資本の総量が中間の地点で階級分化が始まっていることが特徴的である。資本の総量が比較的少ない階級は文化資本による分化が見られないことは、1995年SSMデータの分析結果と同様である。

## 7.2 女性

2015年SSMデータの分析結果から、5種類のまとまりについては男性の場合とほぼ同様のことを女性の場合にも指摘することができる。ただし、それぞれのまとまりについて、相違点がある。第1のまとまりについては、初等教育の学歴、階層帰属意識が「下」、世帯収入が最も低い層が、男性の場合ほどには近い位置でまとまっておらず、まとまりとは言えないかもしれない。第2と第3のまとまりについては、男性の場合と同様のことを指摘できる。男性の場合では距離のあった第4のまとまりと第5のまとまりは、女性の場合は比較的近くなっている。高威信職・文化系専門職は、男性の場合は第4のまとまりに近かったが、女性の場合は比較的遠く、資本の総量が相対的に最も多い位置にある。

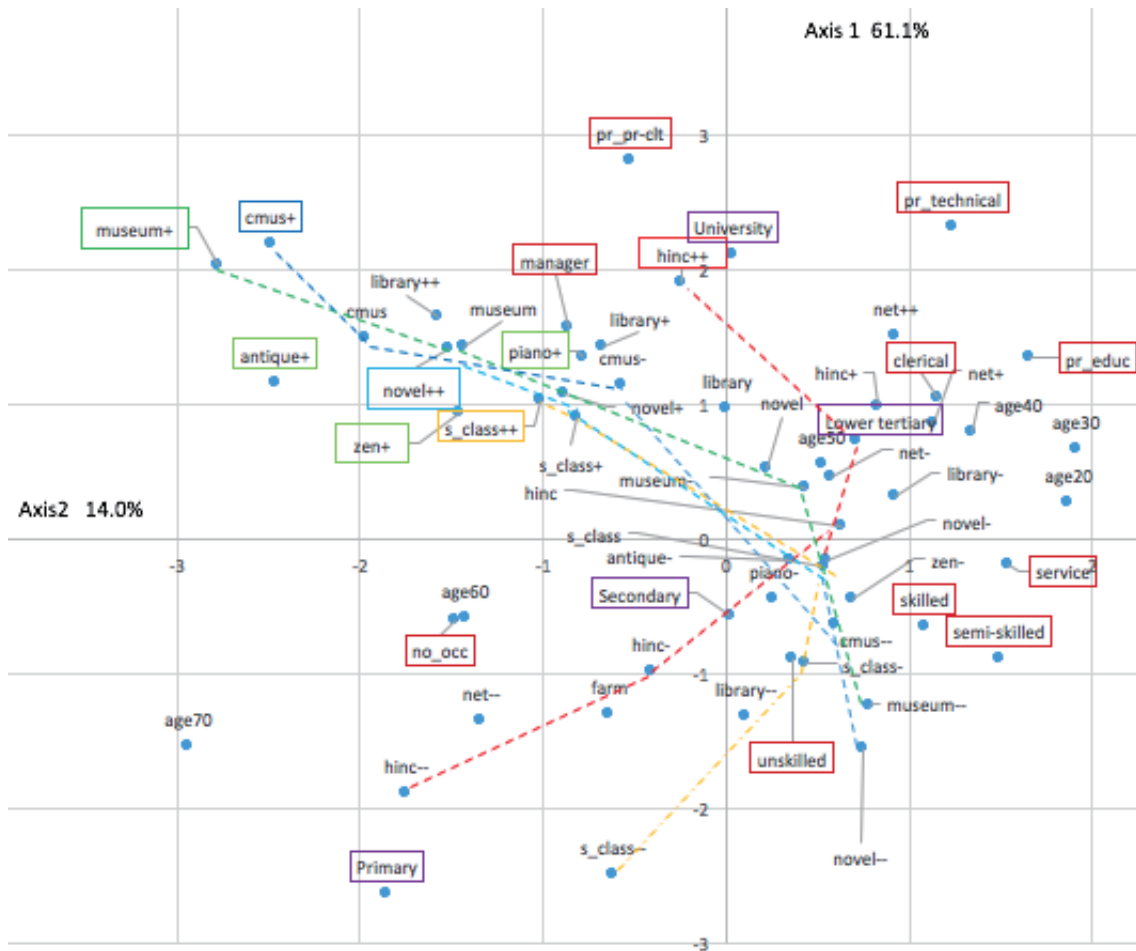


図4. 2015年の社会空間（女性）

2015年の男性の結果では、管理職、世帯収入が高い人（700万円から1000万円未満、もしくは1000万円以上）たちが、経済資本は多いが文化資本は相対的に少ない第3のグループに属すると位置づけられていた。他方で、女性の場合は、世帯収入が1000万円以上、管理職は、高威信・文化系専門職と同様に、第4のグループ、すなわち経済資本が多く、文化資本も相対的に多いグループと位置づけられる。このように、2015年の女性の結果は、1995年の結果からは大きく変化しておらず、経済資本と文化資本との関係が安定的であることを示している。男性の場合、1995年では文化資本の量も多いグループに位置づけられていた世帯収入が高い人たちや管理職者が、文化資本が少ないグループへと変化しているように見える。その意味で、女性の方が経済資本の高低と文化資本との対応関係が、より明確であるように見える。また女性についても、階層帰属意識と文化活動との対応関係はより明確である。階層帰属意識の高さは、文化活動の頻度が高い傾向がみられる。

#### 8. 2015年SSMデータについての回帰分析を用いた再分析

本稿は、1995年と2015年のSSMデータを用いて、文化と階級・社会階層との対応関係を

多重対応分析によって明らかにしてきた。本節では、多重対応分析によって明らかにされた知見について、回帰分析を用いても同様の傾向を確認することができるか、再検討する。対応分析では、データから抽出された次元と個々の回答カテゴリについての各次元の得点を用いて散布図を図示し、そこから回答カテゴリ間の対応関係について考察した。カテゴリ間の距離は、類似性や関連性として解釈可能であることから、視覚的に距離の近いものについて、関連性があるとみなしグループ分けを行った。とはいえ、これまでの著者たちの考察は、統計的検定をふまえたものではない。以下では、対応分析の結果にもとづく著者らの考察の妥当性を、回帰分析によって確認する。

分析では従属変数として「クラシック音楽のコンサートへ行く」、「美術館・博物館へ行く」の質問に対する回答結果を足し合わせたものを用いる。最小値が2点、最大値が10点であり、値が高いほどこれらの文化活動の頻度が高いことを意味する。独立変数には、年齢、学歴、職業、世帯収入、階層帰属意識を用いる。対応分析の時と同様に、分析は男女別に行う。結果は、表1として示した。男性の結果から見てみると、分析に用いたすべての階層変数が従属変数である文化活動の頻度に統計的に有意な影響を及ぼしている。学歴が高いほど、文化活動に積極的である。職業では、高威信・文化系専門職の得点が顕著に高い。表1では、基準カテゴリを非熟練と農業に設定しているが、技術系専門職を基準にしても、高威信・文化系専門職との間に有意差が見られた。熟練と半熟練については、非熟練・農業と有意差が見られなかった。これらの仕事に従事する人たちは、文化活動に対してあまり積極的ではない。こうした傾向は、対応分析の結果と一致している。階層帰属意識については、「下の上」を基準とすると「上・中の上」との間に、10%水準で有意な差が見られた。とはいえ、後述する女性と比べると、階層帰属意識による差はさほど大きくはない。最後に世帯収入については、200万円未満を基準にすると、世帯収入が増加するにつれ、文化活動の頻度も上昇する傾向が見られる。

女性の結果に目を転じると、女性についても男性とほぼ同様の傾向を確認することができる。学歴、職業、階層帰属意識、世帯収入いずれも、文化活動の頻度に統計的に有意な影響を及ぼしている。男性との違いに注目すると、それぞれの階層変数の影響の及ぼし方に若干の違いが見られる。たとえば、学歴や階層帰属意識による違いは男性よりも女性の方が大きい。その反面、世帯収入による違いは、女性の方が小さい。このように、女性の文化資本は、収入といった経済資本よりも、学歴や階層帰属意識といったものに大きな影響を受けている。回帰分析による分析結果は、おおむね対応分析の結果と一貫するものであるといえるだろう。



表1 文化活動を従属変数とする重回帰分析

	男性		女性	
	coef.	s.e.	coef.	s.e.
年齢（基準：20代）				
30代	-0.210 <sup>+</sup>	0.116	0.113	0.114
40代	-0.236 <sup>*</sup>	0.115	0.219 <sup>+</sup>	0.112
50代	-0.071	0.115	0.341 <sup>**</sup>	0.114
60代	0.092	0.112	0.813 <sup>**</sup>	0.113
70代	0.290 <sup>*</sup>	0.121	0.911 <sup>**</sup>	0.122
学歴（基準：中卒）				
高卒	0.406 <sup>**</sup>	0.082	0.714 <sup>**</sup>	0.086
短大・高専卒	0.648 <sup>**</sup>	0.107	1.092 <sup>**</sup>	0.095
大卒以上	0.941 <sup>**</sup>	0.091	1.671 <sup>**</sup>	0.109
職業（基準：非熟練と農業）				
高威信・文化系専門	1.268 <sup>**</sup>	0.268	1.250 <sup>**</sup>	0.329
技術系専門	0.296 <sup>*</sup>	0.141	0.307	0.224
教育・福祉系専門	0.347 <sup>*</sup>	0.151	0.408 <sup>**</sup>	0.142
管理	0.273 <sup>**</sup>	0.104	0.654 <sup>**</sup>	0.169
事務	0.260 <sup>*</sup>	0.113	0.385 <sup>**</sup>	0.130
販売	0.240 <sup>+</sup>	0.123	0.291 <sup>*</sup>	0.135
熟練	0.047	0.109	0.152	0.158
半熟練	0.038	0.117	0.134	0.155
無職	0.375 <sup>**</sup>	0.099	0.338 <sup>**</sup>	0.120
階層帰属意識（基準：下の上）				
上と中の上	0.134 <sup>+</sup>	0.076	0.322 <sup>**</sup>	0.083
中の下	0.024	0.067	0.140 <sup>+</sup>	0.076
下の下	-0.163	0.125	-0.280 <sup>+</sup>	0.145
世帯収入（200万円未満）				
200-400万円未満	0.218 <sup>*</sup>	0.102	-0.102	0.091
400-650万円未満	0.427 <sup>**</sup>	0.106	-0.038	0.094
650-950万円未満	0.348 <sup>**</sup>	0.115	0.116	0.105
950万円以上	0.473 <sup>**</sup>	0.122	0.235 <sup>*</sup>	0.113
定数	1.879 <sup>**</sup>	0.167	1.517 <sup>**</sup>	0.188
N	2588		2815	
ADJ R2	0.120		0.159	
F	15.68 <sup>**</sup>		23.16 <sup>**</sup>	

注) <sup>+</sup> p < .10    <sup>\*</sup> p < .05    <sup>\*\*</sup> p < .01

## 9. 結論・今後の課題

本稿では、1995年SSMデータと2015年SSMデータを用い、文化と階級・社会階層の関係を分析してきた。その結果から、総論として3つの指摘を行うことが可能である。第1に、文化活動と文化資産の変数によって構成される文化資本は、階級を構成する重要な要素である。とりわけ、資本の総量を規準に階級の上下を考える場合、中の上の階級は文化資本の多寡によって経済的階級と文化的階級に分化することが確かめられた。第2に、文化活動の中でも、クラシック音楽の鑑賞、美術館や博物館の訪問、小説や歴史の本の読書、図書館に行

くことなどの文化資本の多寡を表す変数がある一方、パチンコやカラオケなどのようにそうでない変数もあることが確認できた。これらの結果は、片岡らによる文化と社会階層との関係について論じた文化的ユニボア、オムニボアの議論とおおむね整合する結果でもある。第3に、1995年SSMと2015年SSM、および男女で細かな差異があるものの、全体的な傾向としては、5種類の階級的まとまりがあると考えられることである。

なお、4つの「社会空間」の全てにおいて、文化資本に関わる変数を結ぶ線が右に膨らむ形でカーブしていることが確認できる。これは馬蹄効果(horse shoe effect)と呼ばれるもので、対応分析で頻繁に発生する特徴的な現象である(Clausen 1998=2016: 30)。本稿の1995年SSMデータを用いた分析では特に、多様な異なる指標を数多く使っており、必ずしも文化活動に関する項目が、一つの軸にまとまり切れていないために、馬蹄効果が生じているのかもしれない。

以上の分析結果を踏まえ、理論的には次の点の検討が必要になる。一つは、「文化資本」をどのような変数で定義するべきかという問題である。分析の技術的問題から、変数を増やせばいいわけではなく、文化資本を構成する変数として適切なものを選ぶ必要がある。この意味において、2015年SSM調査の4種類の文化活動項目と文化資産項目は適切であった。1995年SSM調査にある子供時代の文化経験を問う質問項目など、文化資本を構成する要素も加えた調査が求められるだろう。

理論的な問題の二つ目は、SSMデータでどこまでブルデューの言う意味での「社会空間」の構築が可能かということである。本稿の分析結果は暫定的に「社会空間」と呼ぶことにしたが、ブルデューのそれとの違いを理論的に検討する必要がある。この問題はまた、質問紙デザインの方法にも深く関わってくる。

三つ目の理論的課題は、階層帰属意識研究との接続である。本稿では、何が階級を構成するのかという問いを設定したため、階層帰属意識については一変数としてしか扱わなかった。本研究の分析結果からは、階層帰属意識が文化的階級を構成する象徴的な境界として作用している可能性を示唆する。すなわち、経済資本を土台として形成された階層帰属意識が、自らの階級的境界を確固たるものとするため、文化活動を形成するというものである。その結果として形成された文化資本は、階層帰属意識をより上方へと高めていくことも予想される。このように階層帰属意識とは、象徴的境界の形成によって、経済資本と文化資本を媒介するものと考えられる。経済資本、文化資本、階層帰属意識の関係についてのさらなる検討が、残された重要な研究課題である。

## 【文献】

- Bennett, Tony et al., 2009, *Culture, Class, Distinction*. London: Routledge. (=2017, 磯・香川・森田・知念・相澤訳『文化・階級・卓越化』青弓社.)
- Bourdieu, Pierre, 1979a, *La Distinction: critique sociale du jugement*, Paris: Editions de Minuit. (=1990, 石井洋二郎訳『ディスタンクシオン : 社会的判断力批判』I-II 藤原書店.)
- , 1979b, “Les trois états du capital culturel,” *Actes de la recherche en sciences sociales*, 30,3-6. (=1986, 福井憲彦訳「文化資本の三つの姿」『actes』1, 18-28.)
- , 1990, “Preface to the 1990 edition,” in *Reproduction in education, society and culture*, 2<sup>nd</sup>. Ed., translated by Richard Nice, London: Sage.
- , 1994, *Raisons pratiques: sur la théorie de l'action*, Paris: Editions du Seuil. (=2006, 加藤・石井・三浦・安田訳『実践理性 : 行動の理論について』藤原書店.)
- Bourdieu, Pierre & Monique de Saint-Martin, 1976, “Anatomie du goût,” *Actes de la recherche en sciences sociales*, 2(5), 2-81.
- Bourdieu, Pierre & Loïc J. D. Wacquant, 1992, *An Invitation to Reflexive Sociology*, Cambridge : Polity Press. (=2007, 水島和則訳『リフレクシヴ・ソシオロジーへの招待 : ブルデュー、社会学を語る』藤原書店.)
- Clausen, Sten-Erik, 1998, *Applied Correspondence Analysis*, London: Sage. (=2015, 藤本一男訳『対応分析入門 : 原理から応用まで : 解説 R で検算しながら理解する』オーム社.)
- Hanquinet, Laurie & Mike Savage, 2016, *Routledge International Handbook of the Sociology of Art and Culture*, London: Routledge.
- 原純輔・盛山和夫, 1999, 『社会階層 : 豊かさの中の不平等』東京大学出版会.
- 片岡栄美, 1997, 「家族の再生産戦略としての文化資本の相続」『家族社会学研究』9(9), 23-38.
- , 2002, 「階層研究における『文化』の位置 : 階層再生産と文化的再生産のジェンダー構造」『年報社会学論集』(15) 30-43.
- , 2003, 「『大衆文化社会』の文化的再生産」石井洋二郎・宮島喬編『反射するブルデュー』藤原書店, 101-135.
- 近藤博之, 2011, 「社会空間の構造と相同性仮説—日本のデータによるブルデュー理論の検証—」『理論と方法』26(1), 161-177.
- Le Roux, Brigitte & Henry Rouanet, 2010, *Multiple Correspondence Analysis*, London : Sage.
- 宮島喬, 1994, 『文化的再生産の社会学 : ブルデュー理論からの展開』藤原書店.
- 中井美樹, 2008, 「階層化、ジェンダー化された消費ライフスタイルと文化資本」『2005年SSM調査シリーズ10 階層と生活格差』, 1-28.
- , 2011, 「消費からみるライフスタイル格差の諸相」佐藤嘉倫・尾嶋史章編『現代の社会階層1 格差と多様性』東京大学出版会, 221-236.

大前敦巳・石黒万里子・知念渉, 2015, 「文化的再生産をめぐる経験的研究の展開」『教育社会学研究』97, 125-164.

Prieur, Annick & Mike Savage, 2011, “Updating cultural capital theory: A discussion based on studies in Denmark and in Britain,” *Poetics*, 39(6),566-580.

Saint-Martin, Monique de, 2013, “Les tentatives de construction de l'espace social, d'« Anatomie du goût » à La Distinction. Quelques repères pour l'histoire d'une recherche,” in Philippe Coulangeon et Julien Duval ed., *Trente ans après La Distinction, de Pierre Bourdieu*. Paris : Éditions La Découverte, 29-44.

Serre, Delphine, 2012, “Le capital culturel dans tous ses états,” *Actes de la recherche en sciences sociales*, 1(191-192), 4-13.

白倉幸男,1997, 「文化的再生産とライフスタイル」『行動計量学』2(1), 37-47.

**Cultural Capital and Class Differentiation in Contemporary  
Japan:  
Multiple Correspondence Analysis of Data from the 1995 and 2015 SSM**

**Naoki Iso  
(Keio University)**

**Hirohisa Takenoshita  
(Keio University)**

**Abstract**

Since the publication of Pierre Bourdieu's *Distinction* (1979), the concepts of cultural capital and social space have had a significant influence on the research fields of class analysis and social stratification. Using SSM data from 1995 to the present, Japanese sociologists have applied the concepts to them. In this article, we attempt to show Japanese class structure as a social space as Kondo (2011) did with the 2005 version of SSM data. Our study differs from Kondo's not only because we use the 2015 version but also because we re-examine Bourdieu's theory and reconstruct social space with the variables redefined. We use the concept of cultural capital as composed of cultural activities and cultural assets. Because the 1995 version has more questions about cultural activities than the 2015 version, the two are not comparative in a rigorous way. Using as many questions as possible, we analyzed how cultural capital composes social spaces at two different times. In both cases, we find similar characteristics: while the total volume of capital mainly composes the class structure between the middle class and the lower class, the volume of cultural capital differentiates the upper class. Also, some cultural activities function as cultural capital, whereas others do not. These facts are more evident for men than for women in both cases. Therefore, there is a function of cultural capital to compose and differentiate the Japanese class structure.

Keywords: cultural capital, class differentiation, social space, correspondence analysis